

## 2022 年度日本認知症ケア学会・認知症ケア賞 実践ケア賞

脳・身体賦活リハビリテーション

【設立年月日】2014年1月

### 【授賞理由】

本団体は、認知症の人と家族と一緒に参加できる包括的な集団リハビリテーションは従前にはない新たな試みといえます。運動・認知訓練を並行することの相乗効果だけではなく社会的交流機能を付加することはリハビリテーションの枠を超えた取り組みとして高く評価することができます。

これらの取り組みは、認知症ケア賞（実践ケア賞）の受賞に相応しいといえます。

### 【団体概要】

脳・身体賦活リハビリテーション（脳活リハ）は、認知症疾患医療センターにて認知症の診断後の患者および家族に対して、リハビリテーションおよび支援を行っている。多くの認知症疾患医療センターでは、診断後のフォローが十分でないことが問題視されており、円滑に介護保険サービスに繋ぐことができていない。本団体では、運動療法と認知訓練を組み合わせた、新たなタイプの包括的な集団リハを提供している。このリハを実施するために、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士が多職種チームとなってコミュニケーションの活性化や意欲向上に努めており、他に類をみないものである。

### 【事業活動】

活動内容の一つとして、1 グループ 4～8 名の軽度認知障害と認知症の人に対して、集団で実施できるプログラムを作成している。グループ内で同一の課題を実施するものの、認知症の人の間で直症度の違いも生じるため、各難易度に応じたアクティビティや認知課題、運動課題、あるいはそれらを組み合わせた二重課題などを毎回異なる課題になるように提供している。

また、同伴する介護者に対する家族教室も開催し、介護者の悩み事の解決に繋がるテーマの資料作成やケーススタディにより、介護者の成功体験などを当事者同士で話し合える家族教室の機会を設けている。

### 【活動内容等】

活動目的：

本活動の対象者は、在宅で生活している軽度認知障害や認知症の人とその介護者である。認知症の人は、症状が重度になっても、在宅生活を望んでおり、また、その介護者も介護可能な状態であれば、在宅生活の継続を望んでいる。対象者に支援が向けられなければ、認知症の人の症状は悪化し、適切な介護もされないまま、在宅生活を断念せざるを得ない。

一方、認知症の方の在宅支援のため、介護保険サービスの利用が望ましい。認知症疾患医療センターでは、急な認知症の診断に患者およびその介護者は落胆し、その精神的支援や介護保険サービスへの移行を支援する必要がある。

すなわち、本活動の目的は、認知症の人と介護者の在宅生活を継続させる支援および生活指導ならびに情報提供を実施することである。

#### 活動の特徴：

上記目的を達成するため、以下の4つを特徴として重視している。1つ目は、認知症の人の自主性を重視し、快適な空間を提供することである。これは、集団の中で何らかの役割を提供し達成感を得もらうことで意欲を向上させるためである。2つ目は、専門的なプログラムを提供することであり、各領域の療法士が専門的に認知機能、運動機能、生活機能などに着目して、それぞれの要素と連動する多面的・包括的なプログラムを提供できるよう課題を作成している。3つ目に、介護者にも支援を行っていることである。リハ時には、介護者も同伴し、疾患教育、介護の悩みや工夫の相談などを、族教室で指導、情報共有している。さらに、急に生じた行動・心理症状や自身の精神状態の変化に対応することを学ぶことができる。4つ目に、病院でのリハのみならず、日々の生活に成果を活かすことができるよう、日常生活や社会生活への汎化を目指している。

#### 活動の効果・影響：

活動の効果として、脳活リハに参加した軽度認知障害と認知症の人は、参加していない者と比較し、日常生活活動(ADL)の能力が維持されている解析結果が出ている。また、今までの経過をみると、生じる行動・心理症状も低値であり、介護者の介護負担感や心理面も悪化させることなく、包括的な援の実施が認められる。このように、認知症の人と介護者に良い効果を示している。

また、活動の影響としては、いくつかの日本や海外の医療・介護施設から視察を受け、当センターのコンセプトに類似した形での認知症の人に対するリハが提供されている医療機関もある。

#### 今後の活動予定：

今後は、我々の手法や治療のスキルを広く外部の認知症疾患医療センターと共有し、認知症のリハの発展を目指している。この他に、国内外で研究成果の発表や啓蒙活動を行い、全国の医療現場、介護現場でも有効かつ実行可能な患者・家族同時介入のプログラムを検討し、在宅生活の継続を望む認知症の人と家族を支援する体制作りに努めていく。